

向き合うふたりの時空

——馮至のコミュニケーション観——

佐藤 普美子

はじめに

詩人馮至（一九〇五—一九九三）の代表作『十四行集』（一九四二）の主題の一つは、李広田が「沈思的詩；論馮至的『十四行集』」（『詩的芸術』一九四三）で指摘したように、「人と人」「人と自然」をはじめとする、いわば「自己」と一切の「他者」との関係性をめぐる思索にある。M・ガリックも「人間のコミュニケーション」が馮至の初期創作（二十年代）の段階から繰り返し現れるテーマの一つであると指摘している。⁽¹⁾六十年余にわたる馮至の創作には作風の変化が認められるものの、その底流には一貫して人と人とのコミュニケーションへの強い関心があるといつてよい。思うに、物語詩や小説のようにストーリー性の強い作品ほどそれが顕著に現れている。しかし、そのことについてこれまで十分に検討されてこなかった。馮至が創出した人と人とのコミュニケーションの境界とはどのようなものか。従来取り上げられることの少なかった彼の物語詩と小説を通してこの問題を考えてみたい。

一 ディスココミュニケーションの悲劇——「帷幔」「蚕馬」

一九二〇年代の馮至のいわゆる「情詩」の多くは片思いを歌うものである。その思いとは淡い憧憬の情緒などではなく、むしろ思う対象とのコミュニケーションがままならぬことへの焦躁感や憂鬱である。しかもそれは同時代の多くの「情詩」のように直情の吐露や内的告白を通して表現されてはいない。馮至の場合、恋愛の渴望感（擬物語性）の強い詩篇の中で、主人公と相手の関係が構図化されることで生き生きと伝わってくる点に特色がある。例えば、物語詩ではないが「什麼能够使你歡喜」（一九二六）⁽³⁾（八行聯×二）は傾国の美女——夏桀末嬉と周幽褒姒——をモチーフに「あなたはどうしても私に笑いかけようと思わない／いったいどんな音（第二聯では「もの」）があなたを喜ばせるのか」というリフレインを用いて、一方通行の恋情を効果的に表現している。第二聯の「烽火の遊戯を好んで見たがる」褒姒は〈笑わない女〉として知られている、いわばディスコミュニケーションを象徴する存在である。⁽⁴⁾この歴史的形像によって読み手は自ずと、彼女の笑い（歡心）を得るまでの幽王の常軌を逸した奮闘ぶり（の物語）を想起し、両者の関係の構図を鮮明にとらえることができる。

さて、馮至の二十年代の叙事詩⁽⁵⁾は中国の歴史的民間的故事を素材にして、死へ収斂するストーリーを持つものが多い。これらに共通するのはディスコミュニケーションのもたらす悲劇性である。ここではそれらの中で特色のある二篇を見ていくことにしたい。

「帷幔」（一九二四）⁽⁶⁾は偶数句末に押韻する四行聯の三七節から成るバラッド形式の物語詩で、尼僧となった一人の少女の短い生涯を綴っている。物語を少し詳しく紹介しよう。ふとした事から親の決めた婚約者が醜く愚昧な男であると知ってしまった十七歳の少女は、婚礼の前夜に一人こっそり家を逃れる。彼女は俗世への未練を断ち切るべく尼

寺に入ること決心する。変化のない出家生活を送っていたある日、尼寺に遠方から一組の兄妹が参拝にやってくる。妹の口からその兄は婚約者に見捨てられたことで一生不婚の誓いを立てたことが語られる。尼僧は眉に憂いを漂わせるその青年の婚約者とはあるいは自分だったのではないかと思ひ悩み、彼等が立ち去った後、病に伏す。ただ死だけを願う日々が過ぎる中、春風の訪れと共に窓の外から牧童の笛の音が聞こえてくる。その高らかに響き渡る音色は彼女に生氣を与え、彼女は赤い絹の帳に刺繡をはじめめる。まず帳の中央に白い蓮花を縫いとり、窓から聞こえる日々異なる新鮮なメロディに合わせるように、彼女の願う理想の世界を縫いとつていく。しかし彼女は左隅に悲しみの世界を縫いとりながら縫いとれず、空白に残したまま秋は深まっていく。ついに彼女は窓を開け（独白の形で）半年来牧童の笛の音が多くての幻想を与えてくれたことを感謝し、自分が長患いで望みのない若い尼僧であり、帳には自分の人の世への願いが縫いとられていることを語る。そして、「でも私たちは永遠に隔てられ離れたまま／二つの異なる世界にいるのです——」と述べたあと帳を窓からほうり、窓を閉める。翌日、牧童が僧院で剃髪し、尼僧は尼寺で火葬される。最終聯は次のようにしめくくられる。「今すでに二百年余りがたった、／帳はなお大切に僧院に収められている。／只あの左隅だけは、／今なお縫い取れる人は誰もいない。」

背景に色彩豊かな自然物のイメージがちりばめられ、それらが変化しながら季節の移り変わりを表す。そこに尼僧の気持ちの揺れ動きが重ねられ時間軸となる。全篇には運命に翻弄されていく者の悲哀感が漂う。ストーリーに起伏が多く、同時代のものに比べてもかなり行き届いた構成を持つ物語詩といえる。ストーリー自体からテーマを読もうとすれば、男女がまともに顔を見ることすらできなかった旧時代の因習が引き起こした悲劇とも、また運命のいたずらが引き起こした悲劇とも読める。あるいは俗世への思いや煩惱を容易には断ち切れない人間の性を表現していると読むこともできるだろう。自由と理想を求めた一人の少女が病弱な体で命を削りながらも行ったその創造的行為（刺

繡)がもつ悲壮美そのものがテーマともいえる。

今これを尼僧と三人の青年——婚約者、参拝にきた青年、牧童(いずれかが同一人物かどうかはわからない)——とのコミュニケーションという点から見てみるとどうか。前二者と尼僧の間には第三者(親類・友人/妹)が介在するだけで、当事者同志間にコミュニケーションは存在しない。ただ尼僧の側が限られた情報から相手について憶測するにすぎない。一方、尼僧と牧童(尼僧の死後、出家して僧侶になる)の間にも直接言葉を交わすという言語によるコミュニケーションは存在しない。あるいは「笛の音」が尼僧の「刺繡」という行為にイメージーションを与え続け、恐らく牧童も後からその事を知り帳を大切に僧院に収めたという点においては一種の非同時的コミュニケーション(交換)が成立したと見なすこともできよう。しかし、尼僧の悲しみが刺繡できなかった帳の空白部分に象徴されるように、相手と共有できなかった時間つまりディスコミュニケーションが積み重なっていく一種の喪失感がこの詩の主調であることは否定できない。

「蚕馬」(一九二五)⁽⁷⁾は『搜神記』の「蚕女」⁽⁸⁾の話(養蚕説話)を素材にした物語詩で、八行聯×五を一節とした全三節(ただし第三節は八行聯×四と十行聯×一)から構成される。遠方に出かけた〈父〉と一人家に残された〈娘〉そして彼女を恋する〈馬〉という三者が織り成すストーリーの基本的骨組みは『搜神記』の話とほぼ同様である。馬は娘のために父を探しに出て連れ帰るが、その様子がおかしいことが父の怒りに触れて殺され皮を剥がれる。その馬の皮が娘を包み込んで桑の木の上で真っ白な繭と化すというものだ。しかし両者の全体的印象と娘の性格付けはかなり異なる。父が馬を殺したのは、『搜神記』では娘が馬をからかい、もし父を連れ帰ったら嫁になると約束していたことで馬がその気になったことが不気味でもあり外聞が悪いということであった。「蚕馬」では馬が娘への思いに悶々として田畑を耕さなかったためであることが間接的に(娘の言葉を通して)語られている。

さらに「蚕馬」の構成上の大きな特徴は次の点にある。このストーリーは〈我〉という語り手が窓越しに〈姑娘〉に歌って聞かせようとするものであり、この語り手の行為そのもの（彼自身の気持ちの変化をも語りかける）もまた大きな枠組みとして「蚕馬」では歌われている。こうして物語の〈馬〉↓〈娘〉↓〈父〉という一方通行の思ひは、〈語り手〉↓〈窓の内にいる娘〉の思ひと重ね合わされることでより一層強められている。

さて物語中の三者の関係をコミュニケーションという観点から見てもみよう。まず父は娘を愛してはいるが、その寂しさについては無頓着である。娘は馬に優しいが、その恋心には気付いていない。一方、馬は父親を連れ帰ってほしいと願う娘の寂しさを察し、直ぐにそれを実現してやる。そして父に殺されて皮になった後もなお、再び一人取り残された娘の寂しさと悲しみを知り、一生彼女を守り続けたいと雷鳴直後の月光の中で彼女をぐるりと包み込んでしまふ。このように馬は包むという行為によって娘を守ろうとする。一方が他方を包み込むというこの行為は激しい愛情の現れであるとともに、ディスコミュニケーションを一気に克服しようとする支配性を帯びた行為でもある。雷鳴と月明りの中で娘と馬が一体化して純白の繭と化す場面はこの詩のクライマックスである。しかしこの合体は娘との合意に基づくものではない。あくまで馬の幻想の中での幸福な合体にすぎない。繭はまた、美しくも悲しい片思いの生成物であり、〈他者〉との真のコミュニケーションを欠いた幻想の共同体を象徴しているといえるかもしれない。

この二篇の物語詩の主人公たち（尼僧／馬）はともに向き合いたい相手との対話を持ってない。それを求めているがら得られないのは彼らが相手と完全に遮断された世界（一方は尼寺、一方は異類）に属していると考えているからだ。言語によるコミュニケーションを断たれた彼らがその渴望感と幻想を満たすための営為が生成物（刺繡／繭）に象徴されている。そこにはディスコミュニケーションによる悲哀の時間が凝集されている。

二 〈窓〉を隔てた対話と接触——「伯牛有疾」

前節で取り上げた二篇の作品は異なるレヴェルではあるが、ディスコミュニケーションの悲劇を表現している。ここから大きく飛躍したコミュニケーションの在り方を描いているのが短篇小説「伯牛有疾」(一九二九)⁽⁹⁾である。

この短篇は『論語』「雍也」篇の一節、(恐らく不治の)病にかかった弟子の冉伯牛を見舞った孔子が窓越しに伯牛の手を取り「之を亡ぼせり、命なるかな。斯の人にして斯の疾あること、斯の人にして斯の疾あること」とつぶやく場面をクライマックスにして、『論語』の他の部分も取り入れながら孔子と弟子の伯牛の関係を小説化したものである。ここでは世間の非難や中傷を意に介さず一人の女性(妻)を心から愛し抜こうとする伯牛と、彼に「おまえが徳を大切にするように色(男女間の情)をも大切にするように」「いったん愛すると決めたからには最後まで愛し続けなさい」⁽¹⁰⁾と励ます孔子とのやりとりがきめ細かく描かれる。特に小説の後半部分、伯牛が病を得てから孔子が彼を見舞う場面は細部にリアリティがあり緊迫感すら覚える。

病人は粗末な小屋に一人ぼっちで隔離されている。手伝いの老婆からは汚れたもののように扱われ、かつての仲間たちは家の前を通り過ぎるか、立ち寄ってもほとんど話もせず慌しく立ち去るだけである。尋ねあててきた孔子と老婆のやりとりを耳にし、聞き覚えのある声に気付いた病床の伯牛はその黄色く干涸びた顔と手を小屋から突き出す。一瞬孔子は驚きで後ずさりしたものの、すぐに窓に駆け寄り、雨の中傘もささず(それまでさしていた傘を傍に置くのである)、そこから差し伸べられた枯枝のような伯牛の手を握りしめて涙するのである。そして対話が始まる。最後に伯牛が、世間の悪評から妻を守るためあえて彼女を家から出したこと、彼女のためなら自分の病の苦痛がどれ程増そうと堪え忍べることをとぎれがちに、しかし力強く語る。じっと耳を傾ける孔子。伯牛の言葉がいささか過ぎる

とは思つても、その死に瀕した顔を見ると何か言うのに忍びない。その後のクライマックスは次のように描かれ、小説は終わる。

彼（孔子）は何とかして彼（伯牛）を慰める言葉を言いたかったが、ついに一言も思いつかなかった。

伯牛はなお大きく目を見開きながら、先生の口から更に教えを受けるのを望んだ。長い長い時間が経過し、二人はぼんやりと見つめあっていたが、最後にやっと孔子は口ごもりながら言った――

「このような人がこのような病を得るなんて、何てどうしようもない運命なのだろうか！このような人がこのような病を得るなんて、何てどうしようもない運命なのだろうか！」

再耕はそれをきいて、頭をうなだれた。

孔子は全身を雨でぐっしょり濡らし、ためらい迷いながら窓の前に立ち尽した。伯牛の手を握りながら、立ち去るのが良いか、それともそのままとどまっているのが良いか、自分でも分らずにいた。

この小説でも伯牛とその妻、そして両者の関係について語り合う伯牛と孔子とのコミュニケーションが重層的に扱われている。しかし何と言つても庄卷は、窓越しに手を取り合うやつれ果てた伯牛と雨に濡れて佇む孔子が作る構図にある。病に冒され死を待つしかない（しかし妻を愛することによってようやく持ちこたえている）伯牛と、愛する弟子の被る抗いがたい運命を前に、ただ打ち震え、眩き、立ち尽すしかない孔子。ここには理解し合うための対話があり、言葉を失う〈永遠〉の瞬間としての沈黙がある。万感を込めた見つめ合いがあり、互いの血の温もりを確かめ合う接触がある。窓を隔てて向かい合う構図は人と人との間には隔壁が厳然と存在すること、両者が決して互いに代われない有限の〈個〉であることの永遠の悲しみをありありと浮かび上がらせる。と同時に、人と人が質的差異を持つ〈個体〉としての認識を持ちながらあえて向き合い、言葉を交し、見つめ合い、身体を触れ合わせる時、最も美し

いコミュニケーションが生まれることを直感させてくれる。この意味で、「雍也」篇「伯牛有疾」の一節はもともと『論語』の中でもとりわけ詩的な場面の一つといえるかもしれない。⁽¹¹⁾しかし馮至はさらに想像によって孔子と伯牛の性格に豊かな肉付けをしながら、この場面を人間間のコミュニケーションの可能性を象徴する構図（画像）として再現することに成功している。

「伯牛有疾」が前節で取り上げた物語詩から大きく飛躍しているのは、人間間のコミュニケーションの可能性がより積極的に模索されていること、また、「自己」と「他者」の関係性のとらえ方にも深まりが見られる点である。

三 原野に立つふたりの〈時間〉——『伍子胥』「溧水」の章

馮至の歴史中篇小説『伍子胥』（一九四六）は、春秋戦国時代の楚の一英雄伍子胥が祖国を追われ様々なタイプの人間と関わり合いながら、父と兄の復讐を果たすべく呉の国に入るところまでを扱っている。⁽¹²⁾一般的に良く知られている伍子胥後半生のエピソードよりむしろ復讐を遂げる決意に至るまでの内面の葛藤と経過を描くことに重点があり、様々な人間との接触や体験を通して内面的に成長していく姿を描くという意味では教養小説の色彩を持つともいえる。全九章の中の第七章「溧水」は流浪の末、呉国に入った伍子胥と溧水のほとりで衣を洗う少女とのある日の午後の出会いと交流を描いたもので、全篇中特に詩的な印象を与える一章である。⁽¹³⁾ここには『伍子胥』とほぼ同時期に執筆された『十四行集』中のソネットと符合する表現も幾つか見られ、その点からも興味深い一章である。呉国の名もない一少女にとって伍子胥（彼女にとっては正体の分らぬ一人の疲れた旅人）がどのような存在であったか。ごく短い出会いの時間に二人は何を感じ取ったか。それを馮至はどう描いているかを見ていきたい。

伍子胥に出会うまでの少女についてはこう書かれている。

傍のもの、目の前のもの全てを彼女はとっくにまるで自分の身体のように知り尽していた。……彼女と彼女の周囲をどう区別すべきか分らず、それゆえ彼女自身の生存も感じ取ることができなかった。彼女は「私」以外に「あなた」というものがあることを知らなかった。

一方、伍子胥も楚国内の逃亡生活を経て呉国に足を踏み入れた時、初めて呉国で見聞きするものが「異」であることで「いつもと違う孤独」を覚え「全てが新鮮で見知らぬもの」に感じている。つまり両者は互いに出会うまでは真に〈他者〉とよべるもの、その〈他者〉とのコミュニケーションを知らなかったといえる。

川のほとりで洗濯をする少女と逃亡生活に疲れ飢えた伍子胥。二人は出会ったその瞬間、互いの姿を見つめながらそれぞれ心の中で呟く。

——この情景は子供の頃、母がまだ少女のように若かった時、目の前を一度かすめたような気がする。

——このような姿かたちはどこから来たものかしら？子供の頃、父が泰伯の物語を話して聞かせてくれた時の、故郷を離れた泰伯の姿にどこか似ているわ。

.....

——この重く汚れた服を身にまとうことが私の運命だ。

——わたしは彼のためにも洗濯をしてあげたい。

——米櫃の飯は実においしそうだ。

——この人はきつとおなかが空いているわ。

口には出さない二人の思いが見事に符合しながらゆきかう場面だ。そして伍子胥が少女に向かって一鉢の飯を乞う言葉を口にした時、少女はその瞬間次のように感じとる。

彼女の目の前の宇宙は何千年も静止していたのに、この時突然遠方から人がやって来て、この地の静寂を破った。あちこちで共鳴し合う音楽が生まれたようだった——この刹那に彼女は多くのことを悟ったように思った。……このくだりは〈他者〉と呼べるもの同士の間コミュニケーションが成立した瞬間の宇宙の生命に触れたような感覚をとらえている。さらに少女が米櫃から飯をよそい、伍子胥に与える場面が続けて次のように書かれる。

これは古くて新しい構図である。原野の中央にある一人の女の身体が草の緑の中から生えてきたように、身じろぎもせず一鉢の真っ白な米飯を捧げ持ち、見知らぬ男の前にひざまづく。この男が何者か彼女は知らない。戦士かもしれない。聖者かもしれない。この飯が彼に食べられ体内にはいり、ちょうど一粒一粒の種が大地に植えられたように将来は空にそびえる樹木に成長するはずだ。この構図は一瞬にして消えてしまった、——しかしそれは永遠に人類の原野にとどめられ、人類史上の重要な一章になるのだ。

米飯が伍子胥の手に渡された時、ふたりはこれが「重い贈物」と感じる。そして少女はこの中で突如「何が『取』で何が『与』か」を了解し、「取与の間で『あなた』と『私』も劃然と分れた。」と感じる。これは〈他者〉を認識することで初めて〈自己〉を認識し、〈自己〉の生存を実感した感覚であろう。

さて、第七章の二人の出会いの場面では要所要所に「忽然」「驟然」「刹那間」「一転瞬」など、〈瞬時〉を表す言葉が繰り返し使われていることに気づく。これは〈他者〉との出会いを通して誕生する特別の〈時間〉についての作者の意識と関わっている。

求め続け渴望する〈他者〉との出会いは、通常の時間の流れからいえば、ほんのわずかな一瞬にすぎない。しかし、それは何百年も前の祖先の生命を実感できるような、いわば脈々と連なる生命としての歴史を感じとれる貴重な瞬間である。また堪え忍ぶ長い長い時間の経過の果てにやっと訪れた〈熟時¹⁴〉とでも呼ぶべき瞬間でもある。

亡命者と彼に糧を与える行きずりの少女の短い時間の交流は、人間がある時代のある社会に生きている限り、最もありふれた性質のものかもしれない。しかし、そうであればこそかえって人間間のコミュニケーションの原型といえるのではないだろうか。原野の中で向き合うふたりの時間は、数量的には午後の一ときすぎないが、彼らにとつては永遠を宿す刹那としての〈熟時〉である。この「溧水」の一章は、『呉越春秋』に見られるような伍子胥と彼について決して口外しないと誓い自害する「浣紗女」の儒教倫理に支えられた通俗的ストーリーを超えて、人と人とのコミュニケーションが各々の生に〈熟時〉という特別の〈時間〉をもたらしうることを我々に示唆している。

四 むすびに——〈窓〉という境界と〈熟時〉の発見

本稿が扱った「伯牛有疾」と『伍子胥』「溧水」の章は馮至のコミュニケーションの時空を描く作品の中でも出色の二篇であると思う。

前者は孔子と伯牛が窓越しに向き合う構図に意味がある。いうまでもなく、窓は内部と外界を隔て、そして繋ぐ境界であり、いわば〈自己〉と〈他者〉の行き来を断ち、そして可能にする場である。例えば「帷幔」でも尼寺の窓は俗世間（外界）との障壁である。しかし尼僧にイメージーションを与える笛の音はそこから入り込んできたのだし、尼僧から牧童へ刺繍した帳が投げ渡されたのもその窓を通してであった。「蚕馬」でも、語り手は想う娘のいる窓に向かつて「僕の歌声を聞いて涙を流してくれさえすれば／窓を開けて『誰なの？』と尋ねるには及びません。」と繰り返している。たとえ窓は開けられなくても、悲しい恋物語を歌う歌声だけはそこを通して伝わるのである。

「蚕馬」の語り手や「伯牛有疾」の孔子のように、向き合いたい相手の窓前に歩み寄り語りかける姿勢は馮至の他の作品にも見ることができ¹⁵⁾る。そこでは窓は古典詩詞におけるような内から外を見る眺望のための場¹⁶⁾であるより、む

しろ外にいる「我」が人のプライベートな内的空間を見るための場となっている。この時、「我」は窓の内と外に立ち得る存在となり〈自己〉↓〈他者〉の視線は相対的なものとなる。つまり人は見つめ見詰められる存在であることが構図化される。〈自己〉は〈他者〉の存在によって、すなわちその視線を獲得することで自分の内部を覗き込むことができる。〈窓〉はそのことを可能にする境界の象徴といってよい。このように、馮至の〈窓〉は二個の「我」を〈隔てているように触れ合うこともでき〉〈相手を見、自分をも見る〉不思議な境界の可能性を示唆している。そこは人間が〈人と共に生きていく〉存在であることと、「我」自身の生を生き一人で死ぬしかない〈個〉という存在であることを同時に感得できるテンションに満ちた場でもある。これが馮至のコミュニケーション観を象徴する一空間ではないだろうか。

一方、『伍子胥』『溧水』は人と人とのコミュニケーションによって発見される〈熟時〉というものを、従来の伍子胥と少女の物語に新たな視角を与えることで描き出したものである。前に述べたように、馮至のこうした〈時間〉観は『十四行集』の随所に認められる。これは中国現代詩人たちの〈時間〉意識を考える上でも興味深い問題なので、いづれ稿を改め論ずることにしたい。ここではソネット第一首の前八行を紹介するにとどめておく。

我們準備着深深地領受

私たちは深く受けいれる用意をしている

那些意想不到的奇蹟、

あの思いもよらない幾つかの奇跡を、

在漫長的歲月裏忽然有

長い長い年月の中で忽然と生じる

彗星的出現、狂風乍起：

水星の出現、猛り狂う風の突発。

我們的生命在這一瞬間、

私たちの生命はこの瞬間、

彷彿在第一次的擁抱裏

まるで初めての抱擁の中で

過去の悲歎忽然在眼前

過去の悲しみ喜びが忽然と目の前で

凝結成屹然不動的形体。

そそり立つ不動の形体に凝結するよう。

〈熟時〉を発見するために私たちは果てしなく続くかに思われる日々の中でその到来を受け入れる「準備」をしていなくてはならない。そして〈熟時〉の存在によって私たちは自らの生を形ある実体として触知したように感じることもできる。〈熟時〉は飛躍への契機であり、私たちの生成に決定的重みをもっている。

ふたりが向き合う構図自体は人と人との最もシンプルなコミュニケーションの原風景でもあり、特に目新しいものではない。しかし馮至の創出した「向き合うふたりの時空」は人間間のコミュニケーションが生む不思議な〈境界〉と特別な〈時間〉の存在を私たちに生き生きと伝え、人として在ることの意味を改めて問いかけてくる。これは詩的な力とよぶよりほかない。

注

- (1) Marian Gálik, 'Feng Chih's Sonnets: the Interliterary Relations with German Romanticism, Rilke and van Gogh' "Milestones in Sino-Western Literary Confrontation (1898-1979)" (Asiatische Forschungen; Bd. 98, 1986)
- (2) 入沢康夫『詩の逆説』(一九七三年、サンリオ出版)は〈擬物語詩〉の特徴として「仮構の語り手がある事件の推移を一貫して叙述しているように見える」「その事件が現実ではない数多い特色を持つ」「一見、非現実的事件の叙述の形を取りながら、しかも、その事件を叙述(伝達)することを目的としない『擬叙述性』を挙げている。
- (3) 『北遊及其他』(一九二九年八月、沈鐘社)、『馮至選集』(一九八五年八月、四川文芸出版社)第一卷所収。
- (4) 馮乃超にも褒姒を主人公にした小説「為什麼褒姒哈哈地大笑」(一九二八年三月十日作、原載《創造月刊》第一卷第十一

期、後に小説集『傀儡美人』一九二九年一月、上海長風書店に「傀儡美人」として所収）がある。ここでは褒姒は、侵略され異国に連れていかれたが、周の言葉が理解できず、幽王や宮廷の腐敗した生活を憎むうちに物も言わず笑いもしなくなり、ついに周を破滅に追いやることで嘲笑と反抗の笑いをあげた一人の素朴な少女として描かれる。

- (5) 一般に中国で〈叙事詩〉という時には〈寓言詩〉〈故事詩〉〈童話詩〉〈劇詩〉等を含む。馮至の〈叙事詩〉を最初に評価したのは朱自清（『中国新文学大系・詩集』「詩話」）だが、最近では王榮「認同与自覚：二十年代的中國現代叙事詩」（『文学評論』一九九三年第五期）がある。馮至の叙事風格を「情調型」として「情節型」の朱湘とともに高く評価し、「吹簫人」「帷幔」「蚕馬」「寺門之前」「河上」を取り上げ、それらの隱喩性に富む構成や人の運命をテーマとした新たな美意識の創造が現代叙事詩芸術に可能性を切り開いたとする。他に藍棣之「論馮至詩的生命體驗」（『中國現代、當代文學研究』一九九三年第十期）も馮至の叙事詩三篇に言及する。

- (6) 原載『沈鐘周刊』第七期。原題は「繡帷幔的少尼」。『昨日之歌』（一九二七年四月、北新書局）、『馮至選集』第一卷所収。

- (7) 『昨日之歌』、『馮至選集』第一卷所収。

- (8) 『搜神記』卷十四に見える話。『御覽』卷七六一、卷八二五にも引かれる。

- (9) 原載『華北日報』副刊（一九二九年七月）。『馮至選集』第一卷所収。

- (10) 『論語』「子罕」「衛靈公」兩篇の中の「吾未だ徳を好むこと色を好むが如くする者を見ざるなり」に対する馮至の解釈があらわれている。

- (11) 高橋和巳「論語」（『高橋和巳全集』第十二卷、一九七八年四月、河出書房新社）も『論語』「伯牛有疾」の孔子の「命なるかな……」を「複雑な人間関係の、無限にひろがる感情の一つのシンボルとして」機能する言葉としてとらえ、この場面の「美的感動」を敷衍している。

- (12) 「馮至著訳年表」（『馮至先生紀念論文集』一九九三年六月、社会科学文献出版社）によれば、馮至の「伍子胥」は一九四二年冬から翌四三年春にかけて執筆された。章を分けて、桂林『明日文芸』第一期、重慶『民族文学』第一期に発表され、全

章が『世界文学季刊』第一巻第一、二期に掲載された。全体の構成については拙稿「馮至の『伍子胥』について」(『大東文化大学紀要・人文科学』第十九号、一九八一年三月)参照。

- (13) 呂丁「馮至的『伍子胥』——現代創作略説指導之一——」(『国文月刊』第八十期、一九四九年六月)は「溧水」が「最も誇張された描写」の一章であり、その手法は「中国新文芸中ほとんど用いられなかった」もので「この章を読むと、完全に『憂鬱な神秘の情調に支配され』まるでギリシヤ神話を読むようだ」と述べている。「九葉派」詩人唐湜「馮至的『伍子胥』」(『新意度集』一九九〇年九月、所収。原載『文芸復興』第三巻第一期、一九四七年三月)もこの章に言及する他、卞之琳「詩与小説：讀馮至創作『伍子胥』」(『馮至先生紀念論文集』所収)も、素材として「もともと詩情画意に富む」この場面に馮至が「哲理の抒情」を与えたとする。

- (14) 〈瞬時〉はキルケゴール哲学において重要な観念であり、単なる時間の規定ではない。特に〈永遠〉が孕まれる〈瞬時〉は聖書中に見える言葉「満ちたる時」すなわち「カイロス(熟時)」の名で呼ばれる。二十世紀中葉の特色ある時間観を展開したティリッヒ(一八八六—一九六五)も、それを「存在の深みにおける緊張をはらむ時」すなわち主体そのものの内で動的に決定的にとらえられ「永遠なるものが現世的なるものに突発し、現世的なるものを受け入れるために用意されている時」として、人間存在の眞の主体性へ駆り立てる原理的契機とみなしている。(藤本浄彦「時と歴史」(『知ることと悟ること哲学序説』第八章、一九八三年、勁草書房参照。)本稿で用いる〈熟時〉は、この両者の哲学上の用語ほど厳密なものではなく、広く、新生を自覚する契機となる特別の時間を意味している。なお、馮至には『伍子胥』執筆の約一年前にキルケゴールを論じた文章「一個對於時代的批評」(一九四一)(『馮至學術精華録』一九八八年六月、北京師範学院出版社所収)があるが、そこで馮至が強調するキルケゴールの〈決断〉の意義が、〈熟時〉の観念と関わりを持つことは明らかである。
- (15) 例えば夢幻劇「鮫人」(一九二六)(『馮至選集』第一巻所収)でも、窓は恋人の出現を待ち、そこを隔てて抱擁しあい、ぴしゃりと閉めることで相手を拒絶する、両者の関係を現す場として機能している。

- (16) 張法「『遊』的悲劇意識模式系列」「閨怨模式」(『中国文化与悲劇意識』一九八九年、中国人民大学出版社)によれば、古

典詩詞の特に閨怨詩の中の、窓から外を望む（あるいは欄干に凭れる）行為は遠くにあるものを思う（見たい）行為で、実際には見たいものを見ることはできないため、苦しみと悲しみを深めるだけの眺望であるという。また、中国人の意識の中では「出入り口と窓は単に人の出入りや室内の採光のためではなく」「天地自然と交流して」「宇宙のリズムを体得する」ためのもので、そこから「外界の景物を取捨して吸収する」と古典詩詞における〈窓〉の役割を述べている。ただしこの場合あくまでも「我」は窓の内側に位置している。